

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月17日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720274

研究課題名（和文） 複数言語環境で育つ子どもの関係性作りと日本語教育実践の構築に向けた研究

研究課題名（英文） Study on the language education for children in plurilingual settings focused on the construction of relationships

研究代表者

尾関 史 (OZEKI FUMI)

早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授

研究者番号：00505399

研究成果の概要（和文）：本研究は複数の言語文化背景を持ちながら成長してきた子どもたちに対する日本語教育を周囲との関係性作りに注目して構想することを目的としている。複数言語環境で育った若者へのインタビューを通して、彼らが周囲の人々や社会とどのような関係を築きながらことばを学んでいくのかを明らかにし、関係性作りに注目した日本語教育実践をデザインし、分析・考察を行った。調査研究の成果は口頭発表および論文の形で公表しており、今後も引き続き分析・考察を進めていく予定である。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to design Japanese language education for children in plurilingual settings focused on relationships with others. Japanese learners who grew up in plurilingual settings in their childhood were interviewed. First, on the basis of data from interviews, this study analyzes how learners' relationships with other people and society affect their Japanese language learning. Second, based on the results of the analysis, language education is designed with focus on the construction of relationships. The outcomes from this research presented at academic conferences and in the papers. This study will be continued to develop a deep understanding of the children's language learning and education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,700,000円	510,000円	2,210,000円

研究分野：年少者日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：複数言語環境、年少者日本語教育、継承語教育、外国人児童生徒、国際結婚子弟、帰国生、関係性、日本語教育実践

## 1. 研究開始当初の背景

近年、複数の言語や文化を持ちながら成長する子どもが国内外で増加している。国内では、外国籍児童生徒、帰国子女の子ども、国際結婚家庭の子どもなどの増加に伴い、子どもたちがぶつかる問題が顕在化し、様々な教育実践が試みられている。しかしその多くが、限られた予算や限られた時間の中で対症療法的に行われているものであり、国としての明確な教育方法の提示やカリキュラムの策定、教員養成などは、未だ模索段階にある。一方、海外では、親の仕事や結婚などの理由で海外に渡る帰国生や国際結婚家庭の子ども、世界中を移動し続ける子どもなどが増えている。しかし、このような子どもたちに対する言語教育は、「国語教育」や「成人日本語教育」の枠組みで行われていることがほとんどである。それらの言語教育は子どもたちが本当に必要としている日本語能力を育てる教育になっているのかということが問題視され、新たな言語教育のあり方が模索され始めている。

申請者は、これまで約 10 年間にわたり、国内の日本語を母語としない子どもたちの言語教育支援に携わり、言語教育のあり方を模索してきた。それらの経験および研究成果から、子どもたちの学習への参加や日本社会への適応は単に日本語能力の有無によって決められるものではなく、クラスメートを始めとする周囲の人々といかに意味のある関係性を築いていけるかということに大きな影響を受けていることが明らかになっている。そして、子どもたちが周囲との関係性作りの中で言語能力を育てていくことを目指した教材の開発にも携わってきた。しかし、このような研究成果に基づく具体的な言語教育デザインは今後の課題である。

一方、幼少期に複数言語環境で育った経験を持つ若者たちも増えている。入管法の改正により多様な背景を持つ子どもたちが増え始めた 1990 年代からちょうど 20 年が経ち、子どもたちは若者へと成長したのである。申請者は現在、このような学生たちに対して、日本語授業を行う立場にある。授業実践を行うと同時に、学生たちにインタビューを行い、複数言語環境で育ったことに対する思い、また、幼少期の経験がその後の日本語学習にどのように影響しているのかを調査している。調査からは、自らの持つ複数言語に対する意識が彼らの言語使用や言語習得、ひいては彼らの生き方と深く関わっていることが明らかになっている。しかし、それらの成果を実際にどのような日本語教育実践につなげていくのかという具体的な教育方法の構築や実践は今後の課題である。

そこで、本研究は複数の言語文化背景を持ちながら成長してきた子どもたちに対する日本語教育を周囲との関係性作りの視点から構想することを目的とした。具体的には、子どもたちが教師、支援者、クラスメートなどの「周囲の人々」とどのような関係を築きながらことばを学んでいくのか、日本語学習や教科学習といった「学習素材」とどのように向き合いながら学びを進めていくのか、さらに「自分自身」や「社会」との関係の中でどのようにことばの学びを捉え、ことばを学んでいくのかという関係性作りのプロセスおよび日本語学習のプロセスを明らかにする。そして、それらの知見をもとに、関係性作りに注目した日本語教育実践を構築することを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は複数の言語文化背景を持ちながら成長してきた子どもたちに対する日本語

教育を周囲との関係性作りの視点から構想することを目的とし、2年間の調査研究活動を通して、以下の3点について明らかにすることを目指した。

- (1) 複数言語環境で育つ子どもたち（若者）は、周囲とどのような関係性を築きながら言語学習をしているのか（してきたのか）
- (2) 複数言語環境で育つ子どもたちおよび若者に対する日本語教育実践は関係性作りの視点からどのようにデザインできるか
- (3) 関係性作りの視点からデザインされた日本語教育実践の中で、どのような学びが育まれるのか

### 3. 研究の方法

以下、それぞれの年度ごとの調査研究方法の概要をまとめる。

#### <平成 23 年度>

平成 23 年度には、複数言語環境で育つ子どもたちの関係性の中での学びの実態を明らかにすることを目的とし、以下の3点を実施した。

- (1) 複数言語環境で育った子どもたち（若者）の関係性作りのプロセスおよび日本語学習のプロセスの把握  
国内および海外在住の外国籍児童生徒、帰国生、国際結婚家庭の子どもおよびその親、留学生・大学生らにインタビューを行った。なお、インタビューでは、以下の内容を中心に、これまでの言語学習経験について語ってもらった。
  - ・ 教師、支援者、クラスメートなどの「周囲の人々」とどのような関係を築きながら日本語を学んできたのか
  - ・ 日本語学習や教科学習といった「学習素材」とどのように向き合いながら学びを進めてきたか

- ・ 「自分自身」や「日本社会（現地社会）」との関係の中でどのようにことばの学びを捉え、ことばを学んできたのか

#### (2) 教育機関の視察

子どもたちが学ぶ言語教育機関のうち、年齢や背景が多様な子どもたちが在籍し、子どもたち同士の関係作りを通じた言語教育を実施している海外の言語教育機関（韓国およびタイ）の視察および現地教育関係者との言語教育プログラムのあり方について意見交流を行った。

#### (3) 研究成果の公表

本年度の調査研究から得られた知見をまとめ、学会・研究会、地域の講座等で公表した。

#### <平成 24 年度>

平成 24 年度には、前年度の研究成果を踏まえ日本語教育実践をデザインした。また、それらの実践における学習者の学びの様子を考察することを目的とし、以下の4点を実施した。

- (1) 複数言語環境で育った子どもたち（若者）の関係性作りのプロセスおよび日本語学習のプロセスの把握  
前年度に引き続き、国内および海外在住の外国籍児童生徒、帰国生、国際結婚家庭の子どもおよびその親、留学生・大学生らにインタビューを行った。
- (2) 関係性づくりに焦点を当てた日本語教育実践のデザイン  
留学生向けの日本語授業において、関係性作りに焦点を当てた授業をデザインし、実施した。また、複数言語環境で育つ子どもたちおよび若者に向けた「関係性作りに焦点を当てた日本語支援プログラム」の構築に向けた検討を行った。
- (3) 授業における日本語学習プロセスの分析

## 析・考察

(2)でデザインした日本語授業を実施しながら学生たち日本語学習の様子を分析し、考察した。

### (4)研究成果の公表

2年間の調査研究活動から得られた知見をまとめ、国内外の学会、地域の講座等で公表した。

## 4. 研究成果

### (1)研究の主な成果

国内外におけるインタビュー調査および教育機関の視察を通して、子どもたちの言語学習の実態、周囲との関係性構築の実態を捉えた。分析・考察から得られた知見の概要は以下のようなものである。(学会発表

### (3) (4) (5) (6)、雑誌論文(1)、図書(1))

- ・幼少期に複数言語環境下で日本語を学んだ経験がその後の自己形成やキャリア形成過程での行動選択の際に影響を及ぼしていること。
- ・日本語習得経験に対する意味づけは、個人によって大きく異なっていること。また、意味づけのプロセスは成人した現在まで脈々と続いており、それぞれの言語に対する意識や言語学習への動機といった子ども自身の個人的な要因ともに、周囲からの評価や見られ方といった周囲との関係性の影響を受けながら作られていくものであること。
- ・子どもたちの複数言語習得は、言語習得に対する個人々の気持ちや思い、ことばを使って築いた他者との関係性を子ども自身がどう捉えるかといった極めて個人的なものと深く結びつく中で育まれていくものであること。

また、これらの知見を踏まえ、関係性構築に注目してデザインした言語教育実践の分析・考察からは、以下のようなことが明らか

になった。(学会発表(1)(2))

- ・「自分」をテーマにして、クラスの仲間とやりとりを繰り返しながら日本語学習を進めていくことで、自己を再発見したり自己理解が深まったりしていたこと。
- ・他の学習者たちとの関係が構築されていくにつれ、互いをよりよく知るために日本語のやりとりの場が作用するようになり、そのやりとりの場をきっかけとして、それぞれが自己を見つめ直し、他者を理解し、新たな自己を見出していく様子が見られたこと。

なお、以上の知見は口頭発表および論文の形で広く公表した。

### (2)得られた成果の国内外における位置づけおよびインパクト

本調査研究で得られた知見の意義は以下のようにまとめられる。

- ・これまで日本語能力や知識の量で判断されてきた子どもたちの日本語習得過程を周囲との関係作りという視点から見直したという点。
- ・周囲との関係性作りに注目した日本語教育実践を構想し、実際に授業実践を行いながら分析・考察を行っている点。

以上の理由から、本研究の知見および成果が国内外の複数言語環境で育つ子どもたちの言語教育カリキュラムの構築や教員養成に向けた施策作りに対して、具体的な示唆や提案を与えることができると考える。

### (3)今後の展望

今回の調査研究で得られたデータを引き続き分析・考察していく。また、言語教育実践のあり方について今後も授業実践を続ける中で考えていきたい。なお、得ら

れた知見は、引き続き口頭発表、論文などの形で公表していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- (1) 青木優子・尾関史(2013)「日韓国際結婚家庭における親の言語教育意識と子どもの日本語習得の関係—韓国在住の日本人父母へのインタビューから—」『日本語教育研究』26 (掲載決定)

[学会発表] (計6件)

- (1) 尾関史(2013)「複数言語環境で育った若者たちにとっての日本語・日本語学習—「自分史を書く」クラスの実践を通して見えたもの—」タイ国日本語教育研究会第25回年次セミナー (2013.3.16 於：国際交流基金バンコク日本文化センター)
- (2) 尾関史(2012)「自己形成・キャリア形成を支える日本語教育実践とは—「自分史を書く」クラスの実践から—」日本語教育学会2012年度秋季大会 (2012.10.14 於：北海学園大学)
- (3) 尾関史・青木優子(2012)「国際結婚家庭における親の言語教育意識と子どもの日本語習得—韓国在住の日韓国際結婚家庭へのインタビューから—」2012年日本語教育国際研究大会 (2012.8.18 於：名古屋大学)

- (4) 尾関史(2012)「移動の中で育った若者たちのキャリア形成と複数言語」異文化間教育学会第33回大会 (2012.6.10 於：立命館アジア太平洋大学)

- (5) 尾関史(2012)「移動の中で育った若者は「日本語」・「日本語学習」をどう捉えているのか—学齢期に日本に滞在した若者たちの語りからの考察—」国際研究集会「移動する子どもたち」のことばとアイデンティティ (2012.3.4 於：早稲田大学)

- (6) 尾関史(2011)「子どもたちの成長・発達における日本語習得の意味—日本語を学んできた若者たちの語りに注目して—」2011世界日本語教育研究大会 (2011.8.21 於：中国・天津外国語大学)

[図書] (計1件)

- (1) 尾関史(2013)『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか—複数言語環境を生きる子どもへの教育』ココ出版

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者

尾関 史 (OZEKI FUMI)

早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授

研究者番号：00505399